

## 《 田中 伸二 様 講演本文 》

40年前、私は、西洋料理を習得するためにヨーロッパに渡りました。当時、オイルショックのあおりを受け、ヨーロッパ各国は、外人労働者、特にアジアからの労働者の規制を始めたところでした。その中で、まだ可能性があったスイスに単独で正規の労働許可を受けられたのは幸運と言えます。シャフハウゼンというスイスの北の小さな町の小さなホテルのキッチンで仕事が始まりました。私の専門は、日本食とは無関係だったのですが、当時、どのホテル、レストランも、定期的に世界各国料理フェアを行うのがはやりでして、当ホテルもご多分に漏れず、早速私に日本フェアをするからすき焼きと天ぷらを作れと言われ、日本食などやったことのない私でしたが、日本から来た料理人ですので断ることもできず、すぐに家から日本料理本を送ってもらい、日本料理を一から勉強し始めました。これが、私と日本料理との出会いで、日本食教本との修行が始まりました。

しかし、教本に載っている調味料および素材がない上、カップの分量も不確かで正確には作れません。そこでお米は、先ほど伊藤さんも言われたとおり、お米はデザートに使うミルクライス、みりんは白のポルト酒、お酒はドイツのリースリング、小麦粉にはふくらし粉を入れて天ぷらなどにいろいろ工夫して、昔、母が作ってくれた味を思い出しながら料理した結果、ホテルのオーナーや料理長、そしてお客さまよりお褒めのお言葉を頂き、まずは一安心致しました。

その後、行く先々で日本食フェアを要求され、日本食を提供し、数と種類をこなしてきた結果、おかげさまで外国人向きの日本料理なら何でもこなせるようになりました。そのころには、日本のものがすべてそろうようになり、素材も良くなり、楽になりました。その後、ベルン的高级老人ホームに長い間就職致しましたが、そのときの豊富な時間を利用して、日本食パーティーサービスを副業として始めました。というのも、私の家族もスイス人の妻を含め7人の大家族となり、経済的に必要になったからです。その副業のおかげで、スイス料理界での人脈ができ、その後の日本食コンサルタントおよび独立の際に大変役に立ちました。

現在、洋食と日本食の技術を使った創作レストランにおいて、年に数回日本料理教室を開いております。主にすしを教えておりますが、参加者がいつも20人前後あり大盛況です。皆さん、すしが大好きです。自分で作りたくて、私の実演を真剣に見つめ学んでいきます。その後、ネタの料理を私のところで購入し、そして自宅ですしパーティーをする人がたくさんおります。ニューヨーク、ロンドン、パリなどと違い、スイス、特にベルンは、閉鎖的な町で、新しいものを受け入れるのに時間がかかります。そんな個性的な町で、1996年から寿司バーを開き繁盛したことが不思議なくらいですが、17年後の現在、益々日本食に興味を持つ方が増え、これからも有望な展開が期待できると信じております。お客さまの層も厚く、男女を問わず子どもからお年寄りまで、そして政府関係のお役人から大臣、各大使館の要人、銀行、法律事務所の関係者などもよく見られます。

そんなお客さまから頻繁に日本に観光で行きたいのだが、誰か案内が居ないと不安で行けない、という相談を受けるようになりました。私が思うのですが、他の国とは違い、日本は1人で行きづらい印象があるのでしょうか。それで、その要求に応じて、2007年より日本グルメツアーを1年おきに計画し、震災の年以外実行してまいりました。来年の春には、10名前後のグループが2組計画中です。グルメが目的ですが、観光地もたくさん計画に入っております。朝食以外の24回の食事のうち3回が寿司で、他は各種類の料理を取ります。バラエティーに富んだ日本の食生活の素晴らしさを見て、本当に喜んでくれ、旅行の後も、皆さんは私の店に訪れ続けてくださいます。宣伝はしておりませんが、2015年のツアーにも既に予約が入っております。

今では、スイスのスーパーマーケットでも常時購入できる寿司ですが、その多くは残念ながら品質が劣っております。日本の食文化を代表するすしが、スイスでもっと浸透していくために、そして本当の美しいおいしいすしを提供し続けていくためには、私の体が動く限り料理をしていくつもりとっております。

初めて日本からスイスに出発する際、6カ月の約束で家を出てしまい、そのままスイスに居続け、長年両親に心配をかけてしまいました。父はさらに他界致しましたが、この受賞で一番喜んでるのは母で、その母の喜ぶ姿が見られるのは、私の最大の幸せです。

40年前スイスに来て、初めて来たときのことをよく覚えておりますが、何もかも新しい再出発でした。外国に来て自覚できたのは、私はどこへ行っても日本人であり、日本の代表だということです。私は、仕事ばかりで家のことは家内に任せっきりでしたが、それでも子どもたちはスクスクと育ち、皆、私と同じように、日本人としての誇りを持ってくれたこと、非常にうれしく思います。今回、この賞を受賞するにあたって、スイス在日本大使館大使および各関係者の方々に心より感謝を申し上げます。そして、この受賞を本当にうれしく思います。ありがとうございました。